第3分科会　地 域 連 携

会 場　　七尾市文化ホール

日 程　14:00 ～ 受付
14:30 ～ 15:05 オープニングアトラクション
開会行事
15:10 ～ 16:05 基調講演
16:05 ～ 16:20 休憩
16:00 ～ 17:35 パネルディスカッション
17:35 ～ 17:40 閉会行事
17:40　　終了

七尾市遠景　©石川県観光連盟

祝　辞

七尾市長

茶谷　義隆

この度、ここ石川の地で、第73回日本ＰＴＡ全国研究大会が盛大に開催されますこと、心よりお喜び申し上げます。全国各地よりお集まりのＰＴＡ関係者の皆様、そして本大会の開催にご尽力いただいた全ての皆様に、深く感謝申し上げます。

また、ＰＴＡ活動は、ボランティア精神に基づき、保護者の皆様が自らの時間と労力を捧げる、子どもたちのための尊い活動です。日頃の皆様のご尽力に対し、改めて心からの敬意を表します。

本大会が石川県で開催されることは、私たち県民にとって大変意義深いことです。能登半島地震からの復興途上にある七尾市をはじめ、石川県全体が、改めて教育の重要性、そして地域社会におけるＰＴＡの皆様の存在の大きさを痛感しています。皆様がお集まりくださるこの機会が、復興への大きな励みとなることを確信しております。

さて、今回の大会テーマは、「『サステナブルな未来づくりのために』～創造と協働を石川から～」。このテーマは、まさに現代社会が直面する喫緊の課題であり、持続可能な社会の実現に向けて、私たち大人が子どもたちに何を残せるのかを問いかけるものです。未来を担う子どもたちの育成は、学校教育のみならず、家庭、地域社会が一体となって取り組むべきであり、ＰＴＡの皆様が果たす役割は極めて大きいと認識しております。

七尾市は、風光明媚な能登半島の中央部に位置し、豊かな自然と歴史、文化が息づくまちです。能登の里山里海を活かした食文化、そしてユネスコ無形文化遺産にも登録された「青柏祭の曳山行事」などの伝統文化は、地域コミュニティの絆を維持し、子どもたちの豊かな心を育む上でかけがえのない財産です。私たちは、これらの地域資源を活かしながら、子どもたちが主体的に学び、創造性を身につけることができる環境づくりに力を注いでいます。

本研究大会では、分科会を通して、家庭教育のあり方、学校と地域の連携強化、防災などをテーマに活発な議論が交わされることと期待しております。皆様の熱心な研究と実践が、全国のＰＴＡ活動に新たな視点をもたらし、それぞれの地域において、子どもたちの健やかな成長を支える大きな力となることを確信しております。

結びに、第73回日本ＰＴＡ全国研究大会 石川大会が実り多き大会となりますこと、そして全国のＰＴＡ活動が益々発展されますことを心より祈念し、お祝いの言葉といたします。

ISHIKAWA PTA 2025

研究課題

災害を通して得られた教訓を生かす

～ 後悔のない備えを 地域の力で ～

現状と課題

令和6年能登半島地震では、阪神淡路大震災や東日本大震災、中越地震、熊本地震の教訓は果たして活かされていたのでしょうか？

災害大国日本においては、南海トラフ地震に限らず、どんな地域においても様々な種類の災害に遭遇しうることが想定されますが、常に100％の力で備えることはできません。しかし学校を含む地域共同体として、子供の安全や日常を護り、日常の学びの中で取り組むべき備えと心構えがあるのではないでしょうか。

討議の視点

① 令和6年能登半島地震からの復旧・復興の取組の現状
② これまでの災害においての課題
③ 子供の安全に必要な学びと地域共同体のもつリソースと可能性
④ 持続可能な取組みとは

提言者

○ 基調提案者	小川 正 氏	輪島市教育長
○ コーディネーター	髙城 みさ 氏	日本PTA全国協議会理事
○ パネリスト	小川 正 氏	基調講演者
	平野 正樹 氏	元七尾市PTA連合会副会長
	友村 幸雅 氏	熊本市PTA協議会会長
	出川 正人 氏	福島県PTA連合会副会長

基調講演「教訓を生かす　学校･地域との連携」

パネリストとしてもご参加いただきます

小川　　正　氏

経　歴　：
石川県内小中学校教諭として勤務
能登町立小木中学校長　輪島市立輪島中学校長
ホテル・のときんぷら支配人　　等を歴任
２０２２年　輪島市教育長に就任
防災士

講演要旨　：

自然の猛威は人知想定を遥かに超えるものであった。輪島市では、大地震を最大M6と想定した災害対応マニュアル、避難所運営や物資搬送計画で備えていた。実際はM7.6、最大震度7。発災から数日間、道路通信網等様々なインフラが寸断、市内は、東部・中央部・西部に分断となり、直後本庁舎に参集できた職員40／200の2割。初動対応は困難を極め、機能するまでに数日を要した。全ての公共施設は避難所となり、避難者で溢れた。当初毛布1枚なく、ルール・リーダーも不明で、大混乱となった所もあった。学校施設の損害は極めて大きく、使える体育館・教室は、全て避難所となっており、学校再開は全く見通せないといった状況下、市外への生徒集団避難を決断、中央部６小１中学校合同で、市内高校教室を借りて再開する等の判断に至った。一方、能登町小木地区では、２０１１年り生徒と保護者、住民が一体となり防災活動を継続。重ねてきた訓練等がいき、避難所では、生徒が主体的にスタッフとして支え、住民の落着いた行動にも繋がったと聞いた。

二度の大災害を被った輪島市民の避難や行政対応の実態、能登町小木地区生徒・住民の避難の実績等から、次のその時への教訓は、

①道路等全てのインフラの寸断を前提に、参集者2割とし、その上位者が責任者となり
　マニュアルを運用していく体制の整備。
②学校避難所は、公助が機能するまでの3日程度、自助共助で命を守れる物資の備蓄、
　特に簡易トイレ、発電機器、スターリンク等の通信環境、体育館空調設備の整備。
③学校・ＰＴＡ・地域・行政等による避難所運営連絡会設立と運営マニュアルの策定。
④学校と地域が一体となっての避難訓練やマニュアルによる避難所運営訓練等の実施。

講演要旨（続く）　：

⑤自分の命は自分で守り抜き、地域から一人の犠牲者も出さないための『心の防波堤』
　を築く防災教育の推進と地域への啓発。

⑥生徒集団避難にあたり、自治体間での相互連携体制、学校とＰＴＡとの事前確認。

等を、重く受けとめている。

　学校と地域が一体となって進める防災への取り組みは、日頃から生徒と住民の顔の見えるかかわりあいが重要であり、未来を生き抜く生徒の自己肯定感、他者を思いやる姿勢を育み、地域を愛し、持続可能な未来のふるさとづくり・復興へ、その担い手として、主体的に関わろうとする人材育成に大いに資する不可欠なものといえるのでは。

コーディネーター

髙城　みさ　氏

経　歴　：
仙台市立鶴が丘小学校父母教師会 会長
仙台市PTA協議会 副会長　会長　顧問　を歴任
令和６年度～　日本PTA全国協議会 理事

東日本大震災は、2011年3月11日14時46分頃に発生。当時小学校一年生の娘は一人で下校途中でした。離れている場所で我が子の状況がわからず、とても不安だった気持ちが今でも蘇ります。私たちは子育てをしている中で、いつ何時想定外の事態に遭遇するかも知れません。この分科会では、被災を経験したパネリストの方々にご登壇いただき、当時の思いや復興に向けたお話、今後に活かせる情報やヒントを皆様と共有し、お話を展開できたらと思います。

パネリスト

平野　正樹　氏

経　歴　：
七尾市立和倉小学校PTA会長　相談役
平成31年度　七尾市PTA連合会副会長
能登香島中学校PTA会長　　等を歴任
現在　能登香島中学校PTA会長

近年、新型コロナによる緊急事態宣言や、昨年の能登半島地震、その2次被害として長期の断水や人口流出など、能登地域の子供達を取り巻く環境は、我々親世代でも経験した事のない不安定な状況となっており、我々は子供が普通に学校に通えることが、決して当たり前ではない事を思い知らされております。そんな時だからこそ、我々保護者は、よりいっそう子供達の背中をしっかり見守りつつ、学校と密な連携をとりながら、子供の成長を地域ぐるみでサポートしていかなければならないと思っております。

パネリスト

友村　幸雅　氏

経　歴　：
熊本市立画図小学校ＰＴＡ会長
熊本市東区ＰＴＡ連絡会代表幹事 兼
熊本市ＰＴＡ協議会副会長　　等を歴任
2025年4月～　熊本市立湖東中学校ＰＴＡ会長
　　熊本市ＰＴＡ協議会会長

　ＰＴＡの役割の一つは、「ふるさとづくり」ができる団体であると考えています。
熊本は地震や豪雨災害等に見舞われた中でも、保護者・学校・地域が連携し合い、子どもたちを懸命に守ってきました。皆がつながり、知らない人とでも手を取り合った経験から、地域のコミュニティの大切さを再認識しました。その経験により、我々が今住んでいる街、子どもたちにとっての「ふるさと」を守るだけでなく、発展できるような活動を進めていきたいです。

出川　正人　氏

経　歴　：
1971年鎌倉市生まれ
仕事の関係で福島県に移住し、息子の小学校のPTA役員時に東日本大震災に遭う。
令和6年度　福島県PTA連合会　会長
令和7年度　福島県PTA連合会　副会長

【災害に対する思い】
　福島県は東日本大震災・東京電力福島第一原発事故により甚大な被害に遭いました。
震災当時は全国の皆様から多大なご支援をいただき有難うございました。
福島県においては、「原子力災害」という複合災害となり、14年経った今でも震災の傷は完全には癒えないままです。
私たちができることは、津波による生業の復興もそうですが、目に見えない放射線と今でも向き合っている経験を皆様に伝えることだと思ってます。
今後起こりえる大地震への備えの一つとして、皆様と共有できれば幸いです。